

在留外国人の HIV 自己検査に対する受容性と実施可能性に関する研究

在留外国人に対する HIV 検査や医療提供の体制構築に資する研究班

研究代表者	北島 勉	杏林大学総合政策学部教授
研究分担者	沢田 貴志	神奈川県勤労者医療生活協同組合港町診療所所長
研究分担者	宮首 弘子	杏林大学外国語学部教授
研究分担者	Tran Thi Hue	神戸女子大学文学部専任講師
研究協力者	Supriya Shakya	エイズ予防財団リサーチレジデント
研究協力者	仲村 秀太	琉球大学大学院医学系研究科助教
研究協力者	新里 尚美	沖縄県感染症診療ネットワークコーディネーター
研究協力者	本田なつ絵	獨協医科大学埼玉医療センター講師
研究協力者	土屋 菜歩	やまと診療所栗原所長

研究要旨

研究班では、在留外国人を対象とした多言語対応 HIV 検査会を実施してきたが、予約者のうち実際に受検する者の割合は概ね6割程度であった。検査会場へのアクセスやプライバシーの問題などが予約はしたが、受検に結びつかない要因であると考えられる。アジア周辺国や欧米では HIV 自己検査が導入されており、自宅等で受検者の都合に合わせて検査を受けることが可能である。研究班が在留外国人を対象に行った調査では、回答者の約7割が唾液による自己検査を利用したいと回答していた。そこで本研究は、在留外国人に、HIV 自己検査を実施してもらい、その実施可能性を検討することを目的とする。

研究班が主催した多言語対応 HIV 検査会の参加者に、迅速検査の採血後に、検査結果が出るまでの間に、QraQuick による自己検査を実施してもらい、受検者による結果の判読、医師による結果判読及び迅速検査の結果との比較を行った。また、QraQuick の利用しやすさや満足度に関する自記式質問票による調査を行った。

40人が参加した。男性90.0%、20-30歳代80.0%、初めての自己検査92.5%であった。87.5%が自己検査を実施するために助けは必要なく、80.0%が結果の判読が「容易」または「どちらかと言えば容易」で、85%が自宅等で一人でQraQuickを利用できると回答していた。また、86.5%が自宅等で利用する場合、結果が陽性の際のサポートが必要と回答。受検者の判読結果、医師による判読結果、迅速検査の結果は全て一致していた。

QraQuick による自己検査の実施の可能性を示唆する結果であった。今後はより多くの対象者に実際に自宅等で自己検査を実施してもらい、その実行可能性を検討する必要がある。

A. 研究目的

2024年6月末の在留外国人数は約359万人¹⁾で、国籍別では、中国、ベトナム、韓国、フィリピン、ブラジル、ネパール、インドネシア出身者で全体の3/4を占め、アジア周辺諸国出身者の割合が高い。在留資格別にみると、永住者が25.1%と最も高い割合をしめていたが、特定技能/技能実習（18.9%）、技術・人文知識・国際業務（11%）、留学（10.3%）と、比較的在留期間が短く、若い

年齢層が多いグループが40.1%を占めていた。特に特定技能/技能実習や留学で来日する外国人が増加している。彼らは性的に活動的な年齢層でもあるため、HIVを含む性感染症への予防や治療へのアクセスを確保することが重要である。

これまで研究班では、東京、沖縄、埼玉、宮城などで在留外国人を対象としたHIVと梅毒の無料匿名検査会を研究班として、または自治体と協力をして開催してきたが、検査の予約をした者のうち、実際に受検

をしに来るものは6割程度に留まっている。HIV検査受検のニーズはあるが、HIVに関するスティグマにより、対面での受検を難しく感じている層がいることも考えられることから、保健医療施設以外のHIV検査受検の選択肢を増やすことが、アクセスを改善するために重要であると考えた。

アジア周辺国や欧米ではHIV自己検査が導入されている²⁾。HIV自己検査は、受検者の都合に合わせてプライバシーを遵守した形で受検することができるというメリットがある一方、結果が陽性であった場合に必ずしも全員が確認検査につながらないというデメリットが指摘されているが、導入のデメリットよりもメリットの方が大きく、WHOは自己検査の導入を推奨している。日本ではHIV自己検査キットを政府が承認していないため導入に至っていないが、研究班がこれまで在留外国人を対象に実施した調査では、回答者の約7割が唾液を利用したHIV自己検査を今後利用したいと回答しており、日本においてもHIV自己検査へのニーズはあるが、受検者が検体を正しく採取し結果を判読できるか、自己検査受検者が継続して自己検査を利用したいと思うか、自己検査の受検者に対してどのようなサポートが必要か等、自己検査を導入するための国内でのエビデンスは不足している。

そこで、本研究では、在留外国人のHIV検査へのアクセスを改善するために、HIV自己検査の受容性と正確性を検討することを目的とする。

B. 研究方法

本研究は、申請者らが医療機関に委託して開催した多言語対応 HIV 検査会に参加した受検者を対象とした。同検査会の受付の際に、HIV 自己検査に関する調査への協力を依頼し、同意が得られた受検者に対し、迅速検査の採血終了後、HIV 自己検査 (OraQuick) を実施してもらった。自己検査は、待合室をパーティションで区切り、プライバシーを保護する形で実施した。受検者には自己検査に関する説明書を提供し、OraQuick が提供している検査キットの使用法に関するビデオを鑑賞してもらった。自己検査の監督者を配置し、質問等に対応出来るようにした。受検者に検査結果 (陽性、陰性、無効) の判読を含む自己検査に関する自記式質問票への回答を依頼した。医師が迅速検査の告知を行うとともに、当該受検者の OraQuick の結果の判読し、迅速検査の結果と OraQuick の結果、受検者による OraQuick の判読結果を照合した。

協力者には 1000 円の QUO カードを謝品として進呈した。

調査は、2024 年 6 月から 11 月に開催した 6 回の検査会にて行った。

(倫理面への配慮)

本研究の実施に関し、研究代表者が所属する杏林大学大学院国際協力研究科の研究倫理委員会から承認を得た。

C. 研究結果

(1) 申請者の特徴

6 回の検査会に 65 人の予約があり、55 人が HIV 自己検査の調査への参加の意向を示した。検査会に来場した 46 人中 40 人が HIV 自己検査を行っ

表 1. 受検者の基本属性

変数	人 (%)
性別	男性 36 (90.0)
	女性 2 (5.0)
	トランスジェンダー男性 2 (5.0)
	トランスジェンダー女性 0 (0.0)
年齢	20 代 15 (37.5)
	30 代 17 (42.5)
	40 代 5 (12.5)
	50 代 3 (7.5)
在 留 資格	永住者 3 (7.5)
	定住者 4 (10.0)
	技術・人文知識・国際業務 17 (42.5)
	特定技能 2 (5.0)
国籍	留学 6 (15.0)
	日本人/永住者の配偶者等 2 (5.0)
	その他 1 (2.5)
	米国 2 (5.0)
	ブラジル 3 (7.5)
	カナダ 3 (7.5)
	フィリピン 3 (7.5)
	インドネシア 2 (5.0)
	メキシコ 2 (5.0)
	中国 11 (27.5)
	英国 2 (5.0)
	ベトナム 3 (7.5)
在 留 期間	その他 6 (15.0)
	2 年未満 11 (27.5)
	2～5 年未満 10 (25.0)
	5 年以上 19 (47.5)

た。男性 90%、20～30 代が 80%、技術・人文知識・国際業務の資格で在留していた者が 42.5%、中国人 27.5%、在留資格 5 年以上が 47.5%であった。

(2) OraQuick の利用について

受検者の 92.5%が今回自己検査をするのが初めてであった。自己検査の説明書とビデオについて、「わかりやすい」、「どちらかと言えばわかりやすい」との回答が合わせて、それぞれ 97.5%、77.5%であった。87.5%が自己検査を実施するために助けは必要なく、80.0%が結果の判読が「容易」または「どちらかと言えば容易」で、85%が自宅等で一人で OraQuick を利用できると回答していた。

説明書に関するコメントとしては、「チューブを開ける前にスタンドを準備することを伝えた方が良い」、「とても多くのステップがある。」で、ビデオについては、「ビデオでは検査後 40 分経過が経過したら結果を読むなどと言っていたが、20 分経過したら結果を読む必要があるとは言っていなかった。」、「最初、英語の音声聞こえなかった。プラスチックのスタンドにチューブを置くのが難しかった。」であった。

自宅等で OraQuick を利用する場合に、使用方法や結果の判読に関するサポートについては、「不要」/「どちらかといえば不要」を合わせると、それぞれ 73.7%、73.0%であったが、結果が陽性であった場合のサポートについては、86.5%が「必要」/「どちらかといえば必要」と回答していた。

次に HIV 検査を受けるとしたら 55.6%が OraQuick、44.4%が保健医療施設であった。保健医療施設を希望する理由としては、「専門家にやってほしい」、「血液検査の方が信頼できる」、「対面の方が安心」、「他の疾患の検査も同時に受けられるため」、「結果が陽性の場合にすぐにサポートをうけられるから」があげられていた。一方、OraQuick を希望する理由としては、「自宅で手軽に短時間でできる」、「便利」、「他者に見られることを気にせずに検査を受けることができる」、「保健医療施設まで移動し、検査を待たなくても良い」、「偽陰性の問題がなければ OraQuick の方を最初の検査として受けたい」ということであった。

OraQuick による HIV 検査を家族や友人に勧め

るかという質問に対しては、「勧める」63.9%、「たぶん勧める」36.1%であった。

表 2. 自己検査の利用について

	人 (%)
自己検査は今回が初めてか	
はい	37 (92.5)
いいえ	3 (7.5)
自己検査の説明書はわかりやすさ	
わかりやすかった	31 (77.5)
どちらかと言えばわかりやすかった	8 (20.0)
どちらかと言えばわかりにくかった	1 (2.5)
わかりにくかった	0 (0.0)
自己検査のビデオはわかりやすさ	
わかりやすかった	28 (70.0)
どちらかと言えばわかりやすかった	3 (7.5)
どちらかと言えばわかりにくかった	2 (5.0)
わかりにくかった	0 (0.0)
無回答	7 (17.5)
自己検査を行うのに助けが必要だったか	
はい	3 (7.5)
いいえ	35 (87.5)
無回答	2 (5.0)
自己検査の結果判読の難易度	
難しかった	0 (0.0)
どちらかと言えば難しかった	2 (5.0)
どちらかと言えば容易であった	7 (17.5)
容易であった	25 (62.5)
無回答	4 (10.0)
自宅等で一人で OraQuick を利用できるか。	
できる	34 (85.0)
たぶんできる	6 (15.0)
たぶんできない	0 (0.0)
できない	0 (0.0)

(3) 検査結果について

受検者による判読結果は全て陰性で、医師による判読もすべて陰性であった。また、迅速検査の結果も全員陰性であった。

D. 考察

在留外国人を対象とした検査会において、希望者を対象に唾液による HIV 自己検査キット (OraQuick) による検査を実施したところ、受検者の 92.1%が監督者の助けがなくても検査を実施でき、94.1%が結果の判読が容易であったとし、全員が自宅等で一人で OraQuick による検査を利用できると回答していた。受検者の結果の判読と医師の判読結果は一致しており、同日に行った迅速 HIV 検査の結果とも一致していた。

自宅等で OraQuick を実施する際に、使用方法や結果判読に関するサポートを必要とする割合はそれぞれ 25.0%であったが、結果が陽性であった場合のサポートを希望する割合が 80.0%と高かった。受検者の 44.4%が、次回の HIV 検査を保健医療施設で受けることを希望していたが、その理由の中には、検査結果が陽性であった場合に、すぐに専門家に相談できるというものがあつた。また、OraQuick を希望した者の中にも、結果が陽性であった場合に対面で支援があるとありがたいという意見もあつた。そのため、検査結果が陽性であった場合、必要に応じて通訳者の活用を含めた血液検査を受検できるサポート体制を構築することが重要である。このようなサポート体制ができることで、我が国においても、時間的や地理的な障壁やスティグマの問題から保健医療施設での検査を受検者しづらい者にとっては、自己検査が HIV 検査の有効な選択肢の一つになる可能性が出てくると考えられる。

今回は医療施設において医療者の監督のもと実施した自己検査であり、人数も 40 人と少ないことから、今後は、対象者を増やし、自宅等で自己検査を提供することの可能性を検討する必要がある。また、血液による自己検査の実施可能性についても併せて検討することも重要である。

E. 結論

本研究の参加者の OraQuick へ反応は概ね好評であり、我が国の在留外国人にとって HIV 検査の選択肢の一つとなる可能性を示唆するものであつた。今後は、自宅等での利用可能性やサポート体制の構築について検討する必要がある。

参考文献

1) 出入国在留管理庁 在留外国人統計表2024年6月末

(https://www.moj.go.jp/isa/policies/statistics/toukei_ichiran_touroku.html、2024年3月19日閲覧)。

2) 北島勉 HIV自己検査：国際的動向と台湾の事例 日本エイズ学会誌 25：53-60, 2023.

F. 健康危険情報 なし

G. 研究発表 なし

H. 知的財産権の出願・登録情報 なし